

ニコラ・プッサン作《足を洗う女のいる風景》

——ウェラブルムのウェルトゥムヌス——

福田恭子（慶應義塾大学）

ニコラ・プッサン（1594-1665）作《足を洗う女のいる風景》（オタワ、カナダ国立美術館所蔵）は、パリの絵画愛好家ミシェル・パサールのために1650年に描かれた後期の歴史的風景画の一枚である。本作品は長らく主題不明の作品、あるいは主題の存在しない純粋な風景画としてみなされてきた経緯があるが、2003年、ハリスがオウィディウス『変身物語』におけるウェルトゥムヌスとポモナの物語を描いたものであると説明した。この結論は概ね肯定的に受け入れられているものの、未だ定説となっておらず、さらなる説明が求められている。本発表では、ハリスの主張を検証するにとどまらず、新たな文学典拠の指摘、及び作品の新解釈を試みる。

牧歌的な風景の中、足を洗う若い女と年老いた女が描かれた本作品は、ハリスによれば、『変身物語』第14巻で語られる、老婆に変身したウェルトゥムヌス神が果実のニンフ、ポモナをこの神と結婚するよう説得する場面を表している。たしかに同主題の伝統的な図像との共通要素が認められ、ハリスの指摘は説得力を持つ。しかし、プッサンの図像には『変身物語』、そして同主題の先行作例には見られない特異な描写があり、ハリスの主張の問題点として指摘されていた。物語の舞台であり伝統的な図像の特徴でもあったポモナの果樹園をプッサンは描いておらず、その代わりに二人の人物を未開の自然の中に表したのである。この伝統からの逸脱こそが17世紀より主題の同定を困難なものとしてきた要因であり、またこの点にこそ画家独自の意図が表れていると考えられる。

この特異性は、古代の詩人たち、特にオウィディウスが『祭暦』において伝える、ウェルトゥムヌスとローマの歴史によって説明することができるだろう。元来ウェルトゥムヌスはローマと縁のある神であったが、ここで新たな典拠として挙げる『祭暦』では、ウェラブルムと呼ばれる界限にこの神の像が祀られ、さらなる古の時代にはこの場所が未開の沼地であったことが語られる。これまで看過されてきたが、本作品の後景には古代ローマの都市風景が描かれており、なにより、オウィディウスの未開の沼地の描写は、前景の繁茂と水辺の表現を喚起させる。すなわち、プッサンの真の目的は、単にポモナの物語を表すことではなく、ウェルトゥムヌスを通してローマの歴史を示唆することにあった。

17世紀の複数の証言は、パサールがローマの知識に貪欲な人物であったことを伝えている。本発表での知見を踏まえるならば、この風景画は顧客の関心に沿って描かれた。また、新たな典拠の発見により、ローマ建国前後の複数の時代が同時に表されていることが明らかになる。長らく後期作品の議論から切り離されてきた本作品だが、未開と文明の対比による歴史叙述という、この時期のプッサンの主要テーマを内包した風景画として、別作品と併せて考察することも可能となるだろう。